



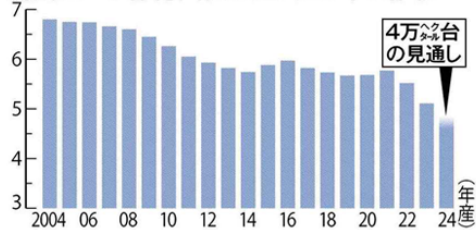
年 組 名前

道新ワークシート

ビート作付け減 想定以上

47年ぶり5万トン割れ

(万トン) ビート作付け面積の過去20年の推移



ビートを栽培するのは国内では道内のみ。砂糖消費量が減少傾向にあることから、農水省は2年前、ビート農家への交付金の支給対象を絞る方針を決め、26年産の作付け指標面積を5万トンとしていた。

砂糖の原料となるビートの道内の2024年産作付け面積が、1977年以来47年ぶりに5万トンを下回る見通しとなった。農林水産省が将来的な減産を打ち出している上、昨年は夏の猛暑で不作となり、農家の生産意欲が低下したためとみられる。農水省の想定を超えた減少ペースで、農業関係者からは、国産糖の供給量や畑の輪作体系への影響を懸念する声が出ている。

日本ビート糖業協会(東京)の今年1月末時点での作付け動向調査では、24年産は4万8650トン。想定を上回る減少ペースで、国産糖の需要を満たせず輸入が増える事態を招きかねないことから、農協などが農家にビートの作付けを呼び掛けることになった。ただ、5万トンには届かない見通しという。

農水省によると、記録の残る58年以降、5万トンを下回ったのは50、60年代がほとんどで最後は77年産の4万9300トンだった。78年産以降は5万〜7万トン台で推移していた。

道内農協は5万5182トンだった22年産の作付け面積を26年産に向けて段階的に減らしていく方針だった

24年見通し 国が減産方針 生産意欲低下

が、23年産が前年産比7%減の5万1081トンまで落ちこんだ。今年は農水省の方針に加え、前年の猛暑でビートから取れる砂糖の量(産糖量)が少なく、所得が減ったことで、別の作物に切り替えた農家がさらに増えたという。ビートは豆類や麦より肥料が多く必要で、最近の肥料高も影響しているとみられる。

道内の畑作地帯では、十勝地方はジャガイモ、小麦、豆類、ビートの4輪作、オホーツク地方はジャガイモ、小麦、ビートの3輪作にしている農家が多い。収量減などの連作障害が懸念されるため、ビートをやめた場合、別の作物を輪作体系に加えるか、3輪作や2輪作に切り替えることになる。ただ、土壌への一定の影響は避けられないという。

J A北海道中央会の担当者「国は減産方針で、温暖化が進む中でこの先も収益が上がらない可能性が高いと考え、仕方なくビートをやめてしまう農家は少なくないようだ」とみている。(徳永仁)

2024年3月11日(月) 朝刊 全道版 1ページ

① ビートは何の原料になる農作物ですか。答えましょう。

② 記事を読み、ビートを栽培している都道府県をすべて答えましょう。

③ 記事を読み、正しいものには○、間違っているものには×を付けましょう。

- 【 】 2022年のビートの作付け面積は、2004年の半分以下に減っている。
- 【 】 農林水産省は将来的にビートを減産する方針を打ち出している。
- 【 】 ビートは猛暑で不作となることがあり、地球温暖化が進むと将来も収益が上がらない可能性がある。
- 【 】 ビート栽培は、豆類や麦を栽培するよりも肥料が多く必要である。